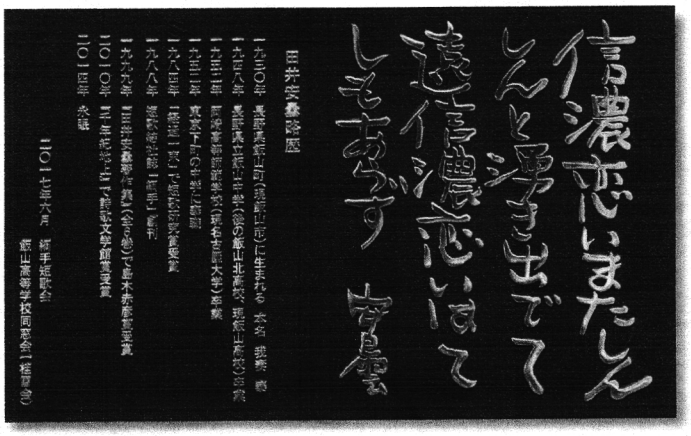
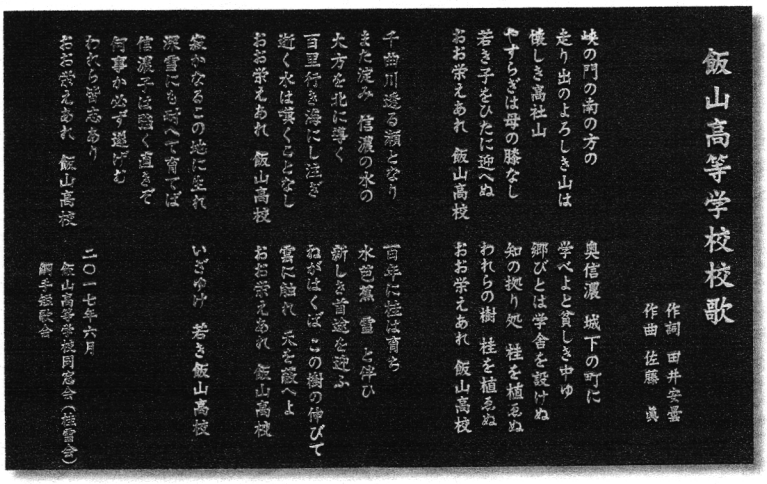
田井安曇作詞飯山高等学校校歌碑
田井安曇歌碑　除　幕　式

平成29年６月24日（土）14時～





次　第（敬称略）

進行　清水久樹教頭

1　開式の言葉（常田新司ＰＴＡ会長）
2　経過報告（米澤光人）
3　学校長挨拶（渡辺藤夫）
4　桂雪会会長挨拶（森　司朗）
5　綱手短歌会より挨拶（井上美地）
　　歌碑の歌について（柳川創造）
6　来賓挨拶
　　宮本衡司（長野県議会議員・桂雪会副会長）
　　長瀬　哲（飯山市教育長）
7　除幕（学校長、同窓会長、県議、PTA会長、綱手）
8　閉式の言葉（関　保典 桂雪会副会長）

長野県飯山高等学校
長野県飯山高等学校同窓会(桂雪会)
綱　手　短　歌　会

信濃恋いまたしん
しんと湧き出でて
遠信濃恋いはて
しもあらず　安曇

高社よ、千曲よ、ふるさと信濃の山を恋い、
信濃の川をかなしむ心は沈々（しんしん）と、また駸々（しんしん）とぼくたちの
心を捉えて離さない。田井安曇のたましいよ、
いつまでもこの碑（いしぶみ）の立つ丘に留まれ。

田井安曇　略歴

一九三〇年　長野県飯山町（現飯山市）に生まれる　本名　我妻　泰
一九四八年　長野県立飯山中学（後の飯山北高校、現飯山高校）卒業
一九五二年　岡崎高等師範学校（現名古屋大学）卒業
一九五二年　東京下町の中学に奉職
一九八四年　「経過一束」で短歌研究賞受賞
一九八八年　短歌結社誌「綱手」創刊
一九九九年　『田井安曇著作集』（全6巻）で島木赤彦賞受賞
二〇一〇年　『千年紀地上』で詩歌文学館賞受賞
二〇一四年　永眠

二〇一七年六月　綱手短歌会
飯山高等学校同窓会（桂雪会）

田井安曇歌集

一九六七年　『我妻泰歌集』
一七七四年　『木や旗や魚らが夜に歌った歌』
『天―乱調篇』
『たたかいのししむらの歌』
一九七六年　『水のほとり』
一九七九年　現代歌人文庫『田井安曇歌集』
一九八〇年　『右辺のマリア』
一九九〇年　『経過一束』
一九九五年　『田井安曇作品集』
一九九八年　『春の星』
一九九九年　『山口村相聞』
二〇〇二年　『弥勒』
二〇一〇年　『千年紀地上』詩歌文学館賞受賞
二〇一六年　『千年紀地上以後』

田井安曇著作集

一九八〇年　評論集『現代短歌考』
評論集『拍車と準縄』
人と作品シリーズ『近藤芳美』
一九八九年　『ある歌人の生涯』
一九九二年　『定本　三ヶ島葭子』
一九九九年　『田井安曇著作集』（全6巻）
島木赤彦文学賞受賞
埼玉歌人会大賞受賞

校歌碑・歌碑　製造・設置：一粒工芸社（川口市）
パンフレット作成：中央堂印刷社（飯山市）

飯山高等学校校歌

作詞　田井　安曇
作曲　佐藤　眞

峡の門の南の方の
走り出のよろしき山は
懐しき高社山
やすらぎは母の膝なし
若き子をひたに迎へぬ
おお栄えあれ　飯山高校

奥信濃　城下の町に
学べよと貧しき中ゆ
郷びとは学舎を設けぬ
知の拠り処　桂を植ゑぬ
われらの樹　桂を植ゑぬ
おお栄えあれ　飯山高校

千曲川透る瀬となり
また淀み　信濃の水の
大方を北に導く
百里行き海にし注ぎ
逝く水は嘆くことなし
おお栄えあれ　飯山高校

百年に桂は育ち
水芭蕉　雪　と伴ひ
新しき首途を迎ふ
ねがはくば　この樹の伸びて
雲に触れ　天を蔽へよ
おお栄えあれ　飯山高校

寂かなるこの地に生れ
深雪にも耐へて育てば
信濃子は強く直きぞ
何事か必ず遂げむ
われら皆志あり
おお栄えあれ　飯山高校

いざゆけ　若き飯山高校

二〇一七年六月
飯山高等学校同窓会（桂雪会）
綱手短歌会

作詞者自注二、三

田井安曇

高校校歌はその性格上数代にわたり生徒を鼓舞激励し、また心から懐かしみ、成年に達し尚、自ずから口遊(ずさ)んでいるというようなものでありたく、単なる感傷や懐旧であってはならぬし、また出世主義や国家に殉じすぎるかつてのようなものであってはなるまい。

百年を経た高校の永い歴史や統合という現実も入れたいし、旧校歌の秀章も是非取り入れて置きたい。そんな可成矛盾も含んだ心持ちで全五連を編成。作曲の佐藤　眞先生にお渡しした。以下に各連に少し具体的に触れてお話しすることにしよう。

第一連、遠望し鳥瞰しつつ川上から接近していく。飯山を通ることになる新幹線の視界と一致する。「走り出のよろしき山」は万葉集の柿本人麻呂から来ている。

第二連、郷土を貫ぬいて北を指す「千曲川」は「高社山」と共に外せない。長駆三七六㎞、「百里」に少し足りないが、ここは詩として許されよう。足立鍬太郎先生作詞の旧校歌に大いに拠っている。逝くもの、貫くものとしての河を象徴としている。

第三連、長野県それも北辺となれば風土・地勢のもたらす寒さと大雪が当然出てくる。奔放なだけでない自己形成をここでは言いたかった。「信濃子(しなのご)」は大正短歌の完成者、飯山正受庵等すぐれた詠を持つ島木赤彦に拠った。

第四連、二万石の小城下町は、封建の世が崩れて三十九年、日露戦争の見掛け上の勝利はあっても、貧しい日本の貧しい町であった。条件はこの上なくきつかったが、とにかく学の拠りどころをと先考は「飯山中学」を作ったのであった。シンボルの「桂」は月桂樹の「ローリエ」と象徴的には一つであった。

第五連、ここでは語は少しシンボリックに用いられている。「桂」は北高、「雪」は南高、「水芭蕉」は照丘高であり、校章から来ている。百年経て三校相寄り、新たな出発を誓いあうのである。天に達する「樹」の、希望を現わすは言うまでもない。

付、うしろの、歌唱によらぬ辞の部分は、適宜に場に応じ、詞句を変えて応援等に用いられたい。